シンポジウム顛末記 —— われらはどこへ行く？

1996年9月13・14両日に東大山上会館会議室（本郷キャンパス）において、『ロシアはどこへ行く』と題し、国際シンポジウムが開催された。東大でロシア研究に関わる人々がまとまって大きな企画に取り組んだこと自体が初めてだったうえに、直前になってシニャフスキイ氏が体調をくずして来日キャンセルとなったり、アメリカに研究滞在中のクトコーヴェツ女史のヴィザが飛行機の飛ぶ直前まで発給されなかったり、と気をもむ事件が続出した。それだけに、ゲストの方々の笑顔を空港で迎えることができたときの嬉しさはひとしおであった。

各セッションの内容および、パネラーは以下のとおりである。

開会の辞　和田春樹
【歴史】司会：石井規衛　報告者：ルスラン・スクルィンニコフ、エヴゲニー・アニーシモフ、和田春樹　討論者：栗生沢猛夫
【政治・社会】司会：小森田秋夫　報告者：イーゴリ・クリャムキン、タチアナ・クトコヴェツ、ヴィクトル・シェイニス、塩川伸明　討論者：中村裕
【民族問題】司会：安岡治子　報告者：中井和夫、浦雅春、ファジリ・イスカンデル
＜以上１３日＞
【芸術・文化】司会：川端香男里　報告者：キリル・ラズローゴフ、蓮實重彦、桑野隆、ミハイル・エプシュテイン（論文参加）　討論者：望月哲男
【文学】司会：島田陽　報告者：アレクサンドル・ゲニス、キャサリン・T・ニェポムニャシチー、沼野充義　討論者：井桁貞義
ラウンド・テーブル「ロシアはどこへ行く？」
司会：和田春樹　発言者：外国からのゲスト全員、堤清二（辻井喬）、川端香男里
閉会の辞　蓮實重彦
＜以上１４日＞

各セッションとも立ち見がでるほどの盛況ぶりで、休憩時間にパネラーと熱のこもった議論を続ける参加者の姿もみられた。会場にもっとも感銘を与えたのはやはり第一日目、イスカンデル氏のスピーチであろう。あたたかい感じの、どちらかといえば朴訥だが、力のこもった語り口で、同じ時空間を共有することの重みを感じさせた。学生にシンポジウムの感想を聞いたときにも、まず作家・イスカンデルに会えた喜びや感動を挙げる人が少なくなかった。

多岐にわたる分野のテーマをとりあげたことについては、賛否が分かれるところかもしれない。たしかに朝から晩まで二日間ぶっ通しで、しかも同時通訳に耳を傾けながら集中力を持続させるのは、不可能である。実際、海外からのゲストも、しばしば会場を抜け出してきてはロビーで休息していた。それでも、日ごろ専門毎に分断されがちな研究者たちが交流の場をもてたことには、重要な意義がある。ラウンド・テーブルでは、ロシアの新しい社会イメージをめぐって異なる立場からの意見がぶつかりあったが、のちに「それぞれの意見を正面からぶつけ合う機会はこれまでなかったので、大変に刺激的だった」とクリャムキン氏が感慨深そうに語っていたのが印象的であった。

裏方で地味に活躍していた学生・院生にも同じことがいえる。同じ大学にいながら日頃接触することのなかった分野同士でも、ロシアという共通項を手がかりに話ができたことはシ

ンポジウムの（副産物的とはいえ）収穫だったと思う。裏方からの感想はといえば、シンポジウムが成功したがために度々パニックに陥ったという、うれしい誤算のひとことにつきる。発言者のペーパーのほとんどがロシア語だったにもかかわらず、予想に反して求める人が多く、増刷するも間に合わず、担当者はコピー機につきっきりという羽目になった。同時通訳用イヤホンの貸し出しも、スリルに満ちていた。貸し出しに際して氏名を書いて頂いたが、受付と一緒だったことや、貸出人数が半端ではなかったこと、ゲスト用にとチェックなしでまとめて持ち出してしまうなど、混乱した事態が続出し、毎日の終了時に帳尻が合ったときには、担当者は奇跡的な結末にほとんど涙しそうだったそうである。やはり保証金制度など、より簡略で、より安心な方法を検討する余地があるだろう。

参加者からは「場所が分かりにくかった」という意見が多く寄せられた。（大学はどうしてこう分かりにくいのか。）矢印などの道しるべをもっと盛大に貼るなど、工夫が必要だろう。道に迷って気分を害しては、せっかくのシンポジウムが色あせてしまう。

シンポジウムの前後はまさに狂乱の日々ともいえるものだったが、そのあとに残ったものは、微力ながらもシンポジウムに参加できたことが、これから先、研究を続ける上での財産になるだろう、という確信じみた思いである。ゲストの方々との出会いはそれだけ衝撃的だった。今ではソ連が崩壊したことにすっかり慣れてしまったが、ほんの数年前までは、まだ自由に意見の交換ができる状態ではなかった。ロシア内外に居住する研究者が一堂に会し、忌憚なく話し合う場面に遭遇できたことは、貴重な経験だったと思う。

シンポジウム翌日（15日午後）には、海外からのゲストのための公式エクスカーションとして、はとバスツアーが用意された。浜松町を午後1時40分に出発し、東京タワーに上った後、国会議事堂や皇居を窓外に眺めながら、浅草へ行き、そのあと銀座へ向かうという、いかにもオーソドックスな英語版の東京見物コースである。ガイドは若い男性だったが、なぜか接続詞だけ各国語で交えながら（「ビコーズ・パルスク・パタムーシュト・・・」といった具合に）、よどみなく無表情にしゃべり続ける。ゲニス氏などは、最初、唖然としていたが、終いには笑い出してしまっていた。だが、なによりの教訓は、祝日のはとバスには決して乗ってはならない、ということだろう。あいにく敬老の日を含む三連休で、夏休みの名残を残してか、東京はごったがえしていた。結局、慌ただしさにうんざりして、浅草寺についたところでバスを降りてしまった。

ありがたかったのは、バスの中で、英語のわからないイスカンデル夫妻に、キャシーが通訳を買って出てくれたことである。一見魔女のような容貌に加えて、ニェポムニャシチーなどという長くて仰々しい名前のキャシーは、最初とっつきにくいが、少しでも話をしてみると、誰しもそのひとなつこい人柄に魅せられてしまう。いつも肩に下げている何やら重そうな大きなかばんの中身は、ガイドブックや辞書などだそうだが、結局そんなものを読むよりも会話を楽しむ方を選んでしまい、一度も開かずに終わってしまうそうだ。名所旧跡をバックに写真を撮ろうとカメラを向けると、「自分の顔は鏡を見ればいつだって見られるけど、皆の顔は写真に取っておかなくちゃ」と、いつの間にやら撮られる方に逆転してしまうこともしばしば。彼女はやっぱり魔女で（といっても、絵本に出てくるようなおっちょこちょいな魔女だけれど）、かばんの中に実はいろんな秘密の品々を隠し持ち、写真を撮るといって相手を魔法にかけているのかも。そんな想像さえしてしまうほど、いつのまにか彼女は皆の

心を捉えてしまった。

東京タワーでは、キャシーだけは高所恐怖症とかで下界（?）に残り、蝋人形館を見学した。その他の面々はみな展望台に上ったが、なにせすごい混雑である。エレベーターの順番を待つのに長蛇の列、展望台はまた人だらけ。これでは「はぐれるな」という方が無理かもしれない。案の定、そろそろ降りようか、という段になって、ラズローゴフ氏が姿を消してしまった（人呼んで「消えたラズローゴフ事件」）。展望台を走り回ってさんざん探したが見つからず、気をもみながら下へ降りると、当のラズローゴフ氏は、一足先に降りてバスに乗っていた。ほっとして笑みをもらした当方に向かって、彼は愛想よく投げキッスをくれた。

東京タワーは、諸般の事情でシンポジウム翌日に帰ったアニーシモフ氏が、唯一東京で訪れた所でもある。土地にはそれぞれ霊的な場所があり、高いところからその場所を探すのが、彼の楽しみらしい。

ところ変わって浅草の仲見世では、イスカンデル夫人とクトコーヴェツ女史が、観光客用のカラフルなキモノをお土産に買っていた。一方キャシーは、膨大なお土産用の友人知人リストを抱えながらも、本物志向で、ホテルの部屋においてあった浴衣がお気に召したらしく、「観光客用の贋物じゃなくて、ああいうのがいい」「こういうのはキッチュだから…」と、絵葉書を一枚買っただけだった。ちなみに、生き生きと目を輝かせて買い物にいそしむ女性たちを横目に、男性たちはいささか退屈顔。ラズローゴフ氏曰く、「女性にとって最大の寺院は買い物の店」なのである。

人でごった返す浅草を後にして、今度は地下鉄で歌舞伎座に向かい、一幕見で舞踊『二人道成寺』を鑑賞。開演の３０分ほど前に到着したが、すでに長い列ができており、二人分の席を確保するのがやっとだった。運悪く、この日はたまたま、指定席はみな貸し切りだったのである。一日歩きづめで疲れているのに申し訳ない、と気になったが、歌舞伎自体は大変な好評を博した。感情表現が豊かなクトコーヴェツ女史は、疲れ切って「もう一歩も歩きたくないわ」と言ったかと思えば、「銀座を見られないなんて・・・」とこぼし、歌舞伎の開演時間に間に合わなくなりそうなので、いそげいそげ、とせかした際には、ユマ・サーマンのような眉をつり上げ、襲い掛かるような身振りで「これではまるでソ連のツア・コンだわ！」と抗議していた。でも、歌舞伎を見た後には、「まあ、なんて素晴らしいんでしょう！連れてきてくれてありがとう！」と、両手を広げて抱きしめて感激を表わしてくれた。その後、食事のときに、茶蕎麦を一緒に注文して、一つの皿からフォークで仲良く食べていた、クリャムキン氏とクトコーヴェツ女史の仲むつまじい姿が目に焼き付いている。

はとバスツアーに先駆け、この日の午前中には、「どうしてもパンダが見たい」というキャシーの要望を入れ、インタビュー等の仕事がないゲスト数名と共に、大学から歩いて湯島天神と上野公園に行った。湯島天神では何人かのゲストが御神籤をひいた。クトコーヴェツ女史の引いた御神籤に「失せものは下の方から出る」とあったのを某院生が訳して伝えたところ、「失せものって、たとえばどんなものか」と聞かれ、「眼鏡とか…」と答えた。と、その直後、女史は眼鏡を紛失したことに気づき、「あなたはｋｏｌｄｙｎ（魔法使い）じゃないの」と詰め寄られて困ったそうだ。女史の御神籤は良く当たる。なんと、その後、なくしたと思った眼鏡は部屋から出てきたとか。

上野公園では、時間がなかったため、一目散にパンダの行列に並んだ。小さな子供たちが父親たちに肩車されているのをみて、ラズローゴフ氏は案内の院生に「肩車してあげようか」

と親切に申し出たとか。もちろん、彼女は丁重にお断り申し上げたそうだ。

この日はとにかくハードスケジュールで、ゲストの方たちだけでなく、ロシア語での案内に四苦八苦しながら一日ガイドを勤めた院生たちも、最後には意識朦朧となり、ロシア語はおろか、日本語すら理解できないほど。ゲストたちも、そんな様子を見かねたのか、口々に「かわいそうに、くたくたね…」と、優しい言葉を掛けてくださり、「よしきた、ここからは任せろ」と引率役を引き受けてくれたゲニス氏に、宿舎までの道順を紙に書いて渡し、この日は銀座で解散。

ゲストたちを大勢連れて案内する際、一番苦労するのは、食事の場所を探すことである。条件は、まずは、値段が手ごろであること。目で見て選べるように、写真か蝋の見本があったほうがいい。また、メニューは和洋折衷のバラエティーに富んだものが望ましい。和食大好きで普段から毎日のように食べているというゲニス氏（彼は料理が好きでいつも自分で作る）や、和食はカロリー控えめでいいわ、というキャシーと、どちらかというと和食は苦手な他のゲストたちの、どちらにも満足がいくようにである。せっかく条件を満たす場所を探し、全員の注文を取って安心しても、結局店の人に「時間がないから、全員カレーライスにしてください」といわれてしまったこともあった。

朝食の手配がまた一苦労だった。今回、宿舎に使っていた大学内の施設は、土日にレストランが休業してしまうため、特別に頼んで近くの喫茶店を開けてもらうことにした。ところが、朝になってみると、疲れているのだろう、「朝食より、もう少しゆっくり休みたい」というゲストが続出した。お店の女主人は「せっかく休みのところを無理して開けたのに、約束違反だ。国際理解っていうのはねぇ、こういうところから始まるものでしょ！」と、ヒステリックな怒りよう。翌日から別の店を探したりもしたが、結果的には、各自でサンドイッチなどを買っておいて食べる方が、自由に時間が使えてよかったようだ。こればかりは、ちょっと心配がすぎたかもしれない。

東京見物はとても慌ただしかったし、ゲストの方々と学生とがゆっくり話す機会も少なかったこともあり、学生が中心となって帰国前日に鎌倉ツアーを企画した。鎌倉駅から、まずは江ノ電に乗って長谷へ行き、大仏を見物した。真っ青な空を背景にした大仏は、思いの外、ゲスト達に感銘を与えたようだ。ゲニス氏は、大仏のまねをして座禅を組み、写真におさまった。知識欲、好奇心旺盛な彼は、暇さえあれば、分厚いガイドブックを熱心に読みふけり、院生にむかって答えにくい玄人肌の質問をしたり、他のゲストたちに妙に詳しい説明をしたりして、にわかガイド達を助けて（困らせて？）いた。米原万里さんが送ってくださったロシア語の鎌倉案内には、ずいぶんと助けられた。この場を借りてお礼を申し上げます。

昼食後、報国寺で竹の庭を眺めながらお抹茶を頂いた。慌ただしかったこの数日間のあとで、はじめてほっと心の安らぐひとときだった。明るく笑いをたたえた目で気さくに話してくれる夫人とは対照的に、イスカンデル氏はいつも両手を後ろに組み、むつかしげな顔をしてゆっくりと歩く。その頭の中にはいったいどんな考えがうずまき、どんなこっけいな作品の構想が浮かんでいるのだろう。作家は「この竹の庭のことを、チークの話に登場させたい」と言ってくれた。楽しみである。

続いて、杉本寺にいにしえの仏たちを訪ねた後、若宮大路へ戻り、残り時間は鶴岡八幡宮の源平池あたりを散策。その間にキャシーは例のお土産リストを手に、いざ小町通りへ。富

士山と海を見たいというゲストたちの希望をかなえられなかったのは心残りだが、古都鎌倉を散策しながら、ゆっくりと語らいの時をもてたことは、シンポジウムにまつわる様々な苦労を補って余りある喜びだったといえよう。取材を含めて公式日程を消化したためか、ゲストの方々もゆっくりと古都を楽しんでくださったように思う。

ところで、シェイニス氏は、さすが国会議員らしく、観光地よりも日本の農業や漁業の実状に関心が高かったとみえ、他のゲストたちとは行動を別にして、はるばる長野に農家を訪ねた。また出発当日にも、早朝5時から築地の魚市場を見学（すしネタを全部日本語で覚えているゲニス氏も勇んで同行し、料理研究家としての博識ぶりを存分に発揮した）するなど、エネルギッシュな視察ぶりだった。この強行軍ともいえる日程は、なんといっても彼のアテンドを担当した院生の破格の努力に支えられていたところが大きいが、非常に控えめな頼み方と、山羊のような優しい目でとてもうれしそうに微笑まれると、つい気持ちが和んでしまい、何とかしよう、という気にさせられる。

ちなみに彼はスクルィンニコフ氏と学校の同級生だったらしいが、一回りぐらい年の差があるように見える（某先生曰く、「シェイニスはラーゲリで鍛えられてるからな」）。スクルィンニコフ氏は、青い野球帽のようなものをかぶり、青白い顔で、背広を肩に引っかけるように着て、ちょっと斜めにかしいだ形を保ったまま、ふわっと浮遊するように歩く。これまでペテルブルグからほとんど出たことがなかったという彼は、長旅に備えてロシアからミルクやリンゴを持参していた。残念ながら体調がすぐれず、鎌倉への遠出は見合わせ、葛西臨海公園（水族館）と皇居の東御苑を訪れた。彼の少年の頃からの夢は、ダンスをうまく踊ることと、水族館に行くことだったそうだ。ダンスは7年前から始め、日本に来てようやく水族館に行くことができ、これで夢がすべてかなえられた、とうれしそうだった。担当者はダンスのステップを教えてもらい、そのお礼にと古き日本の面影を残す町並みの写真集をプレゼントしたところ、「鎌倉に行けなかったことを私はもう後悔しないよ」といってとても喜んでくれたという。

今回教えられたのは、人と出会うことの大切さである。ロシアやアメリカの第一線で活躍している一流の研究者たちとのふれあいを通して、自分の研究活動を見直し、意を新たにするなによりのチャンスを与えられた。裏方の仕事に追われ、講演をゆっくり聴く余裕がなかったのは少し残念だったが、シンポジウム後のフランクな意見交換や気軽な会話の中にも学ぶことがたくさんあったように思う。最後に、このレポートを書くにあたり、数々の苦労話や愉快なエピソードを寄せてくださった皆様に感謝申し上げます。

（毛利・楯岡 記）